

Stage One

「旅立ち」

虫の鳴き声が止んで、草を踏みしだく音が聞かれた。星の明かり以外にはどんな光も見つけられない崖つ淵で、一人佇んでいた男は振り返り、近づいてくる人影を認めた。

「部屋においてではなかったので、こちらかと思いましたが、ランスロット殿」

暗がりから聞こえたのは、彼のよく知る老人の声、滅多なことでは取り乱さない、冷静沈着な人物のそれだった。

「あなたがゼルテニアにおいてとは珍しいこともあるものですね。ウォーレン殿、いつたいどんな火急の用でしょうか？」

老人は、ランスロットの隣まで来ると、立ち止まって、空を見上げた。

「ランスロット殿、いよいよ発つべき時が来たようです。我ら、ゼノビア王国最後のあがきをゼテギネア帝国に見せつけてやるとしましょうぞ」

ランスロットが黙していると、ウォーレンはこの老人には珍しく饒舌に語った。

「あの星をご覧あれ。昨日現れた彗星です。ランスロット殿、あれは我らの希望、〈啓示の彗星〉です。あれが意味するところを、ラシュディほどの魔導師が気づかぬとは思えません」

「そういうことであれば、皆に召集をかけなければなりませんまい。リーダーには、やはりあなたが立たれるのですか？」

「いいや。今度はわたしは脇に徹するつもりです。わざわざ伺ったのは、そのことをあなたと相談したいと思っただけなんです」

「となると、このわたしがリーダーというわけでもなさそうですね。ウォーレン殿、話が長くなるのであれば、わたしの小屋に戻ってはいかがですか？ 春とはいえ、まだ夜風は冷たいのですからお身体にさわりますよう。わたしのところにはまだ林檎酒も残っています」

「いいえ、ここで話したいのです。あなたとわたしのあいだでお気遣いは無用にしてくださいませしよう。あなたの意見を伺う前に、皆に聞かれたくないということもあります、ランスロット殿、わたしの心は実

は決まっています。あとはあなたも含めて、皆が賛成してくれるかどうかだけのことなのです」

ウォーレンからはなみなみならぬ決意が感じられた。いつも温厚で人とのあいだに波風を立てるより、仲裁に回ることの多い彼が、そんなふうにはつきりと言い切ることは珍しかった。

ランスロットはついに立ち上がり、ウォーレンにわかるように右手を差しのべた。

ゼテギネア大陸には「信頼の挨拶には剣振るう手を、別れの挨拶には楯持つ手を」という習わしがあつて、特に戦士層に根強い。

「そういうことでしたら、あなたの話を聞かせてください、ウォーレンIIムーン殿」

老人は微笑み、その手を握り返したのであつた。

ゼテギネア大陸の東の辺境であるヴォルザーク島の入り口、フェルナミア港沖合に、一隻の船が停泊していた。月に一度、島とゼテギネア大陸本土とを結んでいる定期船ではない。もつと優美な船体をした三本の帆柱を持った帆船である。

船首には、一人の女性が立ち、左手を腰の曲刀に添えて、これから入っていくのであろうフェルナミアの

町を眺めていた。

赤銅色の目にも鮮やかな髪を肩のあたりで無造作に束ね、よく日焼けした肌には細かい無数の傷跡を残し、灰色の眼は陽の光に輝いている。刀のほかには小刀と胸当てを身につけただけの軽装だ。

「グランディーナ、この船ではこれ以上港に入ることができません。気の利いた迎えもよこしてもらえそうにありませんし、ここからは小舟を使いますよ」

そう言いながら現れたのは、後頭部に向けて撫でつけた黒髪にちよび髭を生やし、フリルのブラウスを着た気障な男だ。

「ジャック、ここまでありがとう。助かった」

「礼を言われるほどのことではありません。わたしは商人ですからお金の匂うところに来たまです。しかし、ヴォルザーク島に来るのは予定外でした。あなたの頼みでなければ縁もないところだったでしょう」
グランディーナは身軽に小舟に飛び降りた。傷だらけの胸甲がわずかに輝く。それよりも鮮やかなのは、彼女の銅色の髪、磨きあげた銅貨のようなきらめき。彼女に続いて、ジャックも小舟に移った。慣れた手つきで櫂を取ったところを見ると、彼が港まで送っていくつもりらしい。

続いて乗り込もうとした屈強そうな、見るからに用心棒風の男を片手で軽く追い払った。

「それにしてもグランディーナ。本当にほかには何にも要らないんですか？ 仮にもわたしも〈何でも屋〉と名乗る以上、あなたに旅支度も持たせないとあつては名がすたるといふものなんですがねえ」

小舟の先に立っていたグランディーナが振り返った。
「私は戦争屋だよ、ジャック。あなたにはこの二振りの刀をもらった、それで足りる」

「戦争屋とはねえ。もう一ヶ月一緒にいられるのなら、わたしはあなたをどんな淑女よりも美しく見せられる自信がありますよ」

言いたいことを言ってしまうと、彼女はもう向こうを見ていたので、ジャックの言葉も独り言にすぎなかった。

グランディーナの視線は、近づいてくる小舟に慌てた、港の帝国兵を捉えていたのだ。

「ジャック、つかまつている！」

不安定な小舟の上でグランディーナは二、三步助走すると、舳先から波止場に飛び移った。

その反動で小舟は大きく前後に揺れ動いたが、ジャックは權にしがみついて、海に放り出されること

だけは免れた。

けれども彼は、グランディーナが帝国兵のあいだを駆けぬけてゆくところはしつかりと見ていた。

手慣れた様子で曲刀を振るい、あつという間に帝国兵を海にたたき落とした。誰一人死んではない。すべて鞘ごと叩きつけた。

しかし、いちばん奥には隊長とおぼしき男が立っていて、彼女もその手前で立ち止まった。息を切らしてもいないほどだ。

「鮮やかな手つきだな、娘。何が目的だ、こんな辺境の島へ来るとは何を企んでおる？」

グランディーナは曲刀を抜き放った。

「知れたこと、ゼテギネア帝国を倒すため、これがその始まりだ」

「愚かなことを。おまえがいかに優れた剣士であろうと、強大なる神聖ゼテギネア帝国にかなうと思つてゐるのか。それよりもおまえが海にたたき落とした能なしの臆病どもに替わつて士官に取り立ててやろう、その腕前、むぎむぎ死なせるには惜しい。帝国のために役立つろ」

「断る。帝国などに尻尾を振るつもりはない。あなたこそ命が惜しくば、そこを退け」

「馬鹿な奴だ。この俺をおまえの倒した兵士と同じに考えたか?」

「思ってもない。刀を抜いたがその証!」

真つ直ぐな広刃の剣と、片刃の曲刀がぶつかりあつた。火花が飛び、小舟の上のジャックも、遅ればせながら現れたフェルナミアの人びとも固唾を呑んでこの勝負の行方を見守つた。

だが、勝つたのはグランディーナの方だつた。何度か打ち合つた後で一刀両断に刀を振りおろし、隊長は血飛沫をあげて波止場に倒れた。

海に落とされた兵士たちがようやく波止場に這い上がつてきたのはそのときだつた。

彼らのなかには血を見慣れていないのか、隊長の死体を見て悲鳴をあげる者さえいたほどだ。

「た、隊長!」

「武器を捨てて去るがいい。だが手向かうならば、あなたたちも容赦はしない!」

グランディーナは振り返りもせず言い放つた。曲刀の血をぬぐつて鞘に収める。

振り返つたとき、彼女の視界にはぬれねずみの帝国兵士たちは一人も入っていないようだつた。グランディーナはようやく落ち着いた小舟の上のジャックを

見ていた。

「まったく、あなたという女性にはいつも驚かされつばなしですね。もしもわたしが海に落ちたら、どうしてくださるつもりだったんですか?」

「落ちなかつたじゃないか。あなたは泳げるし、まさか小舟の上で彼らとやりあうわけにはいかなかつただろう?」

ジャックは肩をすくめてみせた。

実際、彼は波しぶきひとつかぶつていなかったし、もつと舟が揺れても海に落ちもしなかつたろう。

「グランディーナ、これを持つていつてください!」
ため息混じりに、ジャックは硬貨の半片を投げてよこした。表には光と正義の女神イシュタル、裏には暗黒の魔神アスモデの絵が刻まれている。

「わたしたち商人にも共同體があります。それも國家も大陸をも超えるようなものがね。困つたことがあつたら、これを持つて商店をお訪ねなさい。あなたの名を伝えてくれれば、わたしの名など出さなくとも、すぐに迎えに行きましょう。この大陸のどこにいてもあなたを待たせませんよ!」

彼女は頷いた。右手を上げると、硬貨が陽光に鈍くきらめいた。

「ありがとう。縁があつたら、また会おう！」

ジャックは名残惜しそうに櫂で岸壁を押しした。小舟はまた波止場を離れてゆく。

叫んだグランディーナも赤銅色の髪を翻して、フェルナミアの町の方へ歩いていく。

波が血塗れた波止場を洗った。

いままで隊長の死体と、グランディーナとをかわるがわる見ていた帝国兵たちは、ジャックの小舟が沖の帆船へと戻っていき、グランディーナも港町へ向かうにいたって、ようやく重たい腰を上げた。

彼らを頭ごなしに押さえつけていたくびきが突然外れたのだ。

彼らは戸惑っていた。

自分たちを鮮やかに海にたたき落とした娘の出現に、そして彼女の言葉に。

彼らはゼテギネア帝国しか知らなかった。

この大陸にかつて五つの王国、ゼノビア、ドヌーブ、ホーライ、オフアイス、ハイランドがあつて、このヴォルザーク島がゼノビア王国の一部であつたことも、みんな両親の代の昔話にすぎなかつたのだから。

ところが、グランディーナと呼ばれた娘は、そのゼテギネア帝国を否定するどころか、倒すとまで言い

切つたのだ。

いいも悪いもゼテギネア帝国しか知らぬ彼らには、まさに青天の霹靂へきれきであつた。判断しようにも何も思いつかない。

いきなり、一人の若者が剣を抜き、静かに町に向かうグランディーナの背後から襲いかかつた。

相も変わらず彼女を見守る人びとのなかから悲鳴があがつた。

しかし、大上段から振りおろされたそれを、彼女は平然と刀の柄で受け止めた。

振り返つた目は涼しげで、とても刃がかすつて頬に血を垂らしているとは思われなかつた。

「あつ！」

彼はまだ若かつた。あるいは、二〇前後に見えるグランディーナよりも若い、少年兵と呼んでも差し障りのないような年頃であつた。

彼は吸い込まれるようにグランディーナの目を見つめ、剣を握つた手が激しく震えていることにも気づかぬ様子だ。

「命を粗末にしない方がいい。ゼテギネア帝国になんら恩義を感じているわけではあるまい」

彼は答えなかつた。群衆のなかから彼のものらしい

名を呼ばれても、反応はない。

グランデイナーは後ずさり、少年の刃の下から刀を抜いた。

彼が平衡を崩し、つんのめって無様に倒れても笑い声はあがらない。

ところが逆に、そのことが彼にますます居場所を失わせているようだった。

「ヴェリー」

もう一度、彼の名を呼びながら、一人の中年女性が思いきつて人びとの前に出てきた。その瞬間から、彼女は大勢の一人ではなくなる。

グランデイナーは彼女に目をやった。

「おまえになんか、わかるものか」

震える手で、彼、ヴェリーは剣を握りなおした。

「俺たちがどんな思いであいつの下にいたのかなんて、おまえにわかってたまるかあ!!」

ヴェリーは無茶苦茶に剣を振りまわした。

グランデイナーはその母親をかばいつつ、まるで子どもでもあしらうように剣を避けた。

「ヴェリー!」

悲鳴にも似た母親の絶叫に、狂ったような動きの彼の手が止まった。

彼が顔を上げると、グランデイナーと目が合った。

食い入るような母親の視線とは合わせようとしめない。「気が済んだか。ならば教えてもらいたいことがある。私はゼテギネア帝国を倒すために来た。ヴォルザーク城へはどう行けばいいんだ?」

「ヴォルザーク城?!」

その名に、人びとのあいだにざわめきが広がった。

それは驚きと恐れとを含んでいるようだった。

だが答えは返らず、グランデイナーは根気強く、同じ問いを口にした。

「私はヴォルザーク城に行きたい。フェルナミアから、どう行けばいいのか、道を教えてくれ」

人びとはなおもざわめいたが、なかなか返事は出てこなかった。

やつと口を開いたのは、元帝国兵の一人だ。

「北の門から街道が続いている。ずっと北上して橋を越えてから分かれ道を西に行けば、じき廃城が見えてくる。それがヴォルザーク城だ」

帝国兵たちは皆、武器も鎧も捨てていた。

「でも、あの城にはよくない噂しかない。帝国を倒すつたつて、いったい、あんた一人でするつもりなんだ?」

「当てはある。私はそのためにヴォルザーク島に呼ばれた。ありがとう。騒がせたな」

グランディーナは身を翻した。ヴィリーの剣がかすめた傷は、もう血も乾いていた。

「待って！ 俺も一緒に連れていってくれ。俺も、ゼテギネア帝国と戦いたいんだ！」

「俺もだ」

グランディーナが行くと群衆は道を開けた。

そのうちの幾人かは狼狽うろたえて、熱にうなされたような若者たちと彼女とを見比べている。

だが、グランディーナは立ち止まらなかった。よどみない歩みで目的地へ向かっていく。

その後を、帝国の兵士だった若者たちががてんでに追った。なかには港まで戻っていつて、捨てた武器と鎧よろいを拾ってくる者まであるほどだ。

フェルナミアの出口で、とうとうグランディーナは立ち止まった。

突然、振り返ると、目にも留まらぬ速さでいきなり先頭のヴィリーに斬りかかった。

悲鳴があがったが、誰もがすぐに彼女が斬ったのは鎧よろいだけであったことに気づいた。彼の一度も実戦にさらされなかつた鎧よろいはもう使いものにはならないだろう。

「帰るんだ。本当の戦争はこんなものじゃない」
その一言に彼らはぞつとした。

ゼテギネア帝国から派遣され、一人で威張り散らした隊長とは明らかに違っていた。誰もが隊長は嫌いだつた。

だがグランディーナは、彼らとはそもそも立つところ、生きて呼吸している空気さえも違っている。

彼女は苦笑いを浮かべた。だが、次の瞬間にはもうヴォルザーク城目指して歩き始めていた。

あとを追う者は今度は一人もない。

グランディーナの姿は、一度もフェルナミアの町を振り返ることなく、街道の彼方に消えた。

一方そのころ、フェルナミアの沖合から、ようやくジャックの帆船が、ヴォルザーク島を離れるべく動き始めていた。

「まったく、〈何でも屋〉のジャックともあろうお人が、あんな娘のいつたいどこを気に入ったつて言うんですかい？」

「あなたたちには女性を見る目つてもものがないんですね」

そう言いつつ、彼は形のよい髭をなでつける。

「彼女は魅力的ですよ、すこぶる興味を覚えますねえ。女性は特定しないのがわたしの主義ですが、彼女だけは別格にしてもかまわないでしょう」

「あの、触れば怪我しそうなところがですかい？
まるで抜き身の刃だ、女の格好をしてたつて、とうてい女になんか見えやしないでしょうともさ」

「おやおや、いくらあなたたちでもこれ以上、彼女を侮辱することは許しませんよ。その切れそうなどころも含めて、わたしは彼女が気に入っているんですからね。でもそんな気持ちに気づいてもらえないとは、せつないですねえ。いやいや、気づいていながら彼女のことだ、己に課せられた使命に狩り立てられて、女性ならば誰もが憧れる、美しく着飾るというところを見まいとしているのかもしれない。誰ですか、いつまでも笑っているのは？」

とは言うものの、去っていった者をいつまでも嘆いていてもうがありません。我々も行くとしましよう。ゼテギネア帝国でもたんと稼がせてもらわなければ（何でも屋）の名が泣こうというものですからね。それに彼女とは、またきつと会えますとも。

さあ、回り道をしてしまいました、マラノへ向かいますよ！」

フェルナミアの人びとは、今日という日を忘れなかつた。

グランディーナの言つたとおり、この日を境にゼテギネア帝国に反旗を翻す戦いは始められたのだし、そのきっかけは、陽光にきらめく沖合に現れた、一隻の帆船だったからだ。

けれども、彼らのうちのほとんどは、生涯（何でも屋）のジャックの名を聞くこともなかつたし、支配者がゼテギネア帝国から変わつても、生活がそれほど変わるわけでもないのだ。

街道をほとんど休むことなく歩きとおしても、グランディーナがヴォルザーク城とおぼしき城の前に立つたのは、辺りもだいぶん暗くなってからのことだった。城は西に突き出た岬の根元にあり、城の周りには人家が見あたらなかつた。

グランディーナは、半壊した城門をくぐり、主人を失つて久しい中庭に踏み込んでいった。

だが彼女は、すぐにこのまま城中に入っていくことの危険性を察していた。灯りもないうえに、そこらに瓦礫が散乱したままになっている。

グランディーナはそこで、暗がりにも形をたどれる城に近づくと、その入り口から大音声に呼ばわった。

「ウォーレン・ムーーン！ どこにいる、グランディーナだ！ 私は来たぞ！」

反響がいつまでもいつまでも聞かれた。

しかし城内からは物音がせず、彼女が再度大きく息を吸い込んだ途端、入り口のずっと奥に灯りが見えた。

その光のなかでたどることのできる人影は、グランディーナの逢ったあの老人に似ていた。灰色の長衣に杖をついた、旧ゼノビア王国に仕えた占星術師と名乗ったウォーレン・ムーーンに。

「あなたがグランディーナですか？」

「そうだ。あなたがウォーレンだな？」

「そのとおりです。ようこそ、ヴォルザーク城へ。

さあ、光を見つけられてはことです、わたしの部屋へ来てください。」

老人の招くままにグランディーナは階段を下っていった。

さすがに彼が出入りに使っている箇所はきちんと瓦礫も片づけられていたが、城の内部でもあちこちで石が外れたり落つちたりしていた。

地下はさらに暗い。

遠い昔、この城の牢があつたにちがいない。壁には古ぼけた黒っぽいしみが残り、蜘蛛の巣は放置された骸骨まで飾っていた。

「改めてご挨拶申し上げます。わたしはウォーレン・ムーーン、ゼノビア王国に仕えていた占星術師です。よくこんな辺境までおいでくださいました。」

グランディーナは素つ気なく頷いた。

「この城には誰もいないようだな。ウォーレン、あなたと逢つてからもう三ヶ月は経つたはずだ。いたい、いままで何を——」

「待つてください。わたしがあなたに逢つたのは三日前が初めてです。あの翌日には皆に連絡をとりましたが、三ヶ月前ではありません。」

ウォーレンの言葉に、グランディーナは浮いた腰をまた下ろした。

「三日前にお会いしたばかりだというのにあなたの到着が早いと思いました。ゼテギネア大陸の外から来られたのでしょうか？」

「そうだ。歩きと船で三ヶ月かかった。船がなければもつとかかっただろう。三日前など、私は船の上にいたところだ。それで？ 三ヶ月前が三日前でもそれだけの時間はある。いまだ人の一人もない理由には

なるまい。私をリーダーに祭り上げ、反乱軍を結成すると言ったな。まさか考えが変わったのか」

グランディーナの口調は淡々としたものだったが、ウォーレンは目を伏せた。

「そうではありません。彼らの心は揺れているのです。それにあなたの到着にはまだ時間がかかると思っていましたから、ゆつくり考えたいとも言っていました。あなたを疑っているわけではありません。ただ、彼らも逃亡が長い、神経をすり減らしてしまっているでしょう。なかにはゼノビア王国の名を捨てた者もいます。

ゼテギネア帝国のもとで働かざるを得ない者も少なくはありません。それにこれはゼノビア王国の名を冠せられる最後の戦いとなりましょう。失敗すれば我らは捕らえられ、命の長らえることもありません。その事実が重ければ重いほど、あなたを担いで立ち上がることを恐れる者は少くないのです」

「あなたはそうは見えないな。だがウォーレン、私はもうヴォルザーク島にいるのだし、時間を無駄にしない。フェルナミアで少し派手にやった」

「それは、どういうことですか？」

「帝国兵を倒した」

「あの町には六人ほど帝国兵がいたはずですが、そ

の全員をでしょうか？」

「斬ったのは隊長だけだ。ほかの連中は海に落とすて、鎧を一つ壊した」

「彼らには何と？」

「ゼテギネア帝国を倒す、ヴォルザーク城に行くと言った。ここへの行き方も知りたかった。彼らは私についてきたが、断つた。まともな剣の振り方も知らないような子どもばかりだ。むぎむぎ命を落とすことはあるまい。鎧を壊したのはその時だ」

「そうですね。グランディーナ、我々の仲間はこのヴォルザーク島中に潜伏しています。フェルナミアでも、わたしのもとにはまだ何の報せもありませんが、きつと誰かが見ていたにちがいません。明日にもわたしのところへも知らせは届きましょう」

「だがその誰かは、いるのかどうかもわからぬ間に脅えているのじゃないか」

「それも無理からぬことです。ゼテギネア帝国の残党狩りはそれほど厳しいものでした。人の善意さえ疑わねばならぬような時期が長くつづいたのです。どうか彼らを臆病者と責めないでください。彼らに必要なのはきつかけなのです。彼らとて戦う意志を失ってしまったわけではないのですから」

「この島には、フェルナミア以外に幾つ、町がある？」

ウォーレンは筆をとり、墨でもって机上に簡単な地図を描いた。

フェルナミア、ヴォルザーク城、ダスカニアがヴォルザーク島本島にある町の全てだ。

島の中央部が山岳地帯のヴォルザーク島は、その辺境という位置の不便さもあつて人口の増えぬところである。大した産業も知られていない。

最後にウォーレンは離れ小島にあり、帝国軍には知られていないはずの隠れ里ゼルテニアを描いた。ダスカニアの北西にある。

彼はまずゼルテニアを指し、開口一番に言った。

「ここには、わたしと同様に皆をまとめてきたランロットがいます。彼はゼノビア王国騎士団の数少ない生き残りで、ゼルテニアに潜む前はゼテギネア大陸を離れて傭兵として各地を放浪していました。彼はわたしの賛同者です。まだゼルテニアにいますが、ランロットが立てば、皆の気持ちも奮い立たせられるかもしれません」

グランディーナの視線はゼルテニアに向けられ、それから残るダスカニア、ヴォルザーク城、フェルナミ

アを見た。

「では、まずランロットに会いに行くのでしょうか。ダスカニアに行くまでに街道以外の道はあるか？」

「かつては海沿いに行くことができたが、いまはかろうじてたどれる踏み分け道があるぐらいです。街道を戻つてもそれほど時間は違わないと思います。それにダスカニアにも帝国兵がいます。帝国から派遣された兵士以外は地元で徴集された若者ばかりです。フェルナミアの兵を難なく片付けたあなたならばそれほど手こずりはしないでしょうが。お気をつけて」

「私は夜明けに発つことにする。あなたもランロットに会いにいかないか？」

「いいえ、わたしは彼には会つたばかりです。それに皆がここへ来ることになっていきますから、留守にするわけにもいきません。あなたのお帰りをここで待たせていただきますよ」

「出かけるまで私は外で休ませてもらう。狭いところは好きじゃない」

ウォーレンは頷いた。それから、グランディーナを追つて外に出た。

彼女は中庭にある壊れた噴水のところで立ち止まっていた。

「この島は星がきれいだな。あなたの言っていた〈啓示の彗星〉というのはあの赤い星のことか？」

「ええ。ラシュディやエンドドラもきつと見ています。彼らとて、ゼテギネア帝国がこのままの形で存続しようなどは思ってもいらないでしょう」

「ラシュディにエンドドラか」

ゼテギネア大陸の者で、魔導師ラシュディの名を知らぬ者はない。

五英雄の一人であり、大陸一の賢者と呼ばれ、盟友グランを裏切り、軍事国家ハイランドの女帝エンドラとともにゼテギネア大陸を蹂躪した稀代の魔導師。

神聖ゼテギネア帝国を興し、エンドラがその帝位に就いてからは、彼女の補佐役として、現在も帝国中に影響力を持つている。ゼテギネア帝国の強大さは、何よりラシュディがあつてこそだ。

けれど、ウォーレンがそんなことを考えている隣で、グランディーナはもう寢息を立てていた。

膝を抱えて、曲刀は右側に置かれている。三日前の逢以上素っ気ない態度だ。

それでもウォーレンは、彼女の眠りを妨げぬようにそつと立ち去った。

明日の夜にはグランディーナはランスロットに会っ

ているのだろう。

翌朝、グランディーナの出でいったずいぶん後になつてから、数人の見知った顔がウォーレンを訪ねてきた。そのなかには、ヴィリーを始めとする帝国兵だった若者たちも混じつていた。

「彼女は海沿いにゼルテニアに向かっています」

開口一番に彼はそう答えた。

「ウォーレン殿、彼女があなたの仰つた我らのリーダーなのですか？」

一行のなかでいちばん年嵩の男が訊ねる。その息子を伴つて、古びた武器と鎧を身につけていた。

「わたしはそのつもりですし、ランスロット殿の了解も得ています。だが皆さんは反対のようでしたね。彼女の正体もわからず、本当の意図など知れたものではないと。また彼女はわたしがあなた方に話した時にはゼテギネア大陸のどこにもいませんでした。ヴォルザーク島は辺境です。ここまで来るのに何ヶ月もかかるでしょう。だから考える時間もほしいと仰られた。ですから彼女はゼルテニアに向かったのです。わたしに皆を説得できなければ、彼女自身にリーダーとしての素質を示してもらいありませんから」

すると、若者の一人が口を挟んだ。

「俺たちはそんなこと全然知りませんでした。でも、彼女が俺たちを解放してくれたんです。帝国の隊長を倒したということだけでなくて、本当に俺たちは初めて戦うということを知りました。だけど彼女は、俺たちに帰れと言いました、俺たちがついていっても確かに足手まといかもしれない。でも、いままで帝国の権力をかさにきて嫌われ者だった隊長と一緒にあって威張っていたのも俺たちなんです。いまさら、どんな顔をして家に帰れるっていうんでしょう?」

「あなた方のことについては、彼女の判断を仰ぐとしましょう。この前も申し上げたようにリーダーはわたしではないのです。それまでここで休んでいかれますか? それにわたしは、昨日フェルナミアであったことを簡単にしか知りません。どなたか詳しい話を聞かせてはもらえませんか」

それに応えて、誰からともなく声が上がった。
集まった人びとに、もはや迷いはなかった。

ヴォルザーク城より海沿いにダスカニアへとたどる道は、ウォーレンの言ったとおり、人影ひとつなく、まったくさびれていた。

グランデイナーが、ようやくダスカニアの町を見下ろす高台に至ったのは、その日の午後遅くなつてから、夕方といつてもいいような時間になつてからのことだった。

見下ろしたダスカニアの町はフェルナミアよりも幾分大きいようで、夕餉の支度をする煙がいくつも立ち上っている。

グランデイナーは真つ直ぐにダスカニアへ向かった。少し遅れて、五人の帝国兵が南門から出てきた。先頭の一人以外は、フェルナミアの少年兵と同じくらいの若者たちだ。

「生まれ!」

「武器の所持は鞭打ち刑だ!」

「できるものならやってみろ。だがただで取れると思うな」

グランデイナーはことさらに挑発するように曲刀を抜きはなつた。その仕草に何人かがたじろぐ。

けれども先頭の一人だけは挑発に乗つてきた。その男も曲刀を携えている。

「なんのつもりかは知らぬが、こんな田舎でおまえのような奴に逢えようとは思わなかつたわ。娘! 後悔ならあの世でするがいい、帝国への反逆は死罪に値

するのだからな！」

「それはこつちの台詞だ！」

グランディーナも帝国兵も同時に飛び出した。

二人の刀が激しく打ち合い、また離れる。

残る若者たちは鬨に加わるうとせず、一人が脱兎のごとくダスカニアの町中に戻っていった。

再度、グランディーナと帝国兵とは打ち合った。

刀を合わせるうちに余裕しやくしやくだった帝国兵の顔に、焦りの色が浮かんだ。

押されているのは彼の方だ。その動きは次第に防戦一方になっていった。

ついにグランディーナがとどめを刺さんと刀を振り上げたとき、彼の悲鳴にも似た叫びが彼女の手を寸前で止めた。

「た、助けてくれ！ 降参だ！」

彼は刀を捨てて、地べたに頭をこすりつけた。

「それならばヴォルザーク島より去れ。今度、武器を持つて現れた時は容赦しないと思え」

「は、はいっ！」

男がよろめきながら立ち上がった。

だが、彼女はそんな輩にはもう無関心で、一部始終を見つめていた若年兵にも言い放った。

「あなたたちも同じだ。武器を捨てて家に帰るがい。その剣は——」

いきなり背後から無言で斬りかかれた刀をかわして、振り返ったグランディーナの曲刀は卑怯者を一刀両断に斬り捨てていた。

男の身体が崩れた。彼女はそれと血飛沫とを避けて、刹那、その死体を見下ろした。それからグランディーナは改めて帝国兵の方に向き直った。

「助けてくれえっつ！」

「バロウが殺られたああっ!!」

連中は一斉に逃げ始めた。

その向こうから別の帝国兵がやってくる。

グランディーナも歩き出した。指先で刀を拭いながら、逃亡する兵士たちの先にいる者をしっかりと見据えている。

その時、斧が一閃した。

逃げてきた兵士が一人倒され、残りの者は前に斧、後ろに曲刀の迫るのを恐れて立ち止まった。

「神聖ゼテギネア帝国に臆病者は要らん。失せろ、屑どもめ！」

角のある兜をかぶったその帝国兵は、柄の少し長い両手持ちの斧を構えた狂戦士だった。

無精ひげの下から吐き出された怒号は、浮き足だった若い兵士たちを一瞬で統括しなおすだけの迫力を持つっており、このヴォルザーク島に赴任した帝国兵のなかではいちばん手強そうでもある。

グランディーナは唇をかみしめて、自分も刀を構えなおした。相手が近づいてくるので彼女は立ち止まっていたが、その視線は一度だけ味方に倒された兵士に向けてられた。

「女、おまえの用向きはなんだ！ 剣しか取り柄のないバロウを一撃で倒したそうだな。士官の話なら口をきいてやらぬこともないぞ」

「私の目的はあなたを倒し、ゼテギネア帝国を打倒することだ！」

「ぬかしたな！」

狂戦士は一声吠えて斧を振り回した。その廻りを囲んでほかの兵士が立つ。

「命が惜しい奴はその男から離れているがいい。私の相手は彼だけだ、あなたたちがどうしようと刃向かわぬ限り、興味はない」

「かまわねえからやつちまえ！ 何様だか知らねえが、そのすました面の皮ひんむいてやる！ ついでに、よつく可愛がつてやるからありがたく思え！」

帝国兵は狂戦士の命令に従うことにしたようだ。各々、剣を振りかざし、一斉にグランディーナに斬りかかってきた。

一人目の剣を強引にはじき飛ばす。

二人目は返す刀で受け、力任せに押し返した。

三人目の剣を避けて、四人目には柄で突き上げる。

そのあいだに狂戦士が近づいてきていた。

彼女は素早く刀を振り上げた。

目にも止まらぬ早業でそれは振り下ろされ、グランディーナ自身と周囲を巻き込む鎌鼬かまいたちとなつてむき出しの肌を無数に切り裂いた。

だが、振り下ろされた刀の行く先にいた狂戦士が受けたのは鎌鼬どころではない。風は重たい刃となり、兜を砕き、鎧さえも無用の長物となった。

血反吐を吐いて狂戦士は前のめりに倒れ、それきり動かなくなつた。

残る帝国兵の度肝を抜くには十分すぎた。ましてや彼らとて、グランディーナに近づきすぎていて鎌鼬から逃れることはできなかったのだ。

「去れ！ これ以上ゼテギネア帝国につくとあらば、あなたたちも斬る」

そんな言葉は蛇足であった。連中は蜘蛛の子を散ら

すように逃げていった。

大きく息をひとつ吐き出すと、グランディーナは刀を拭い、鞘に収めた。

フェルナミアのようにいつの間にか民衆が遠巻きに見ている。

そのなかから一人の女性が現れた。短い茶色の髪に真っ直ぐな姿勢の生真面目そうな女性である。

グランディーナは彼女に視線をやった。

その眼差しに彼女は一瞬だけ歩みを止めたが、すぐそばまで近づいてきた。

「恐れ入ります。グランディーナさまですね？」

「そうだ。あなたは？」

「これは申し遅れました。私はマチルダⅡエクストラインと申します。あなたのことをウォーレンさまからお伺いいたしておりましたわ」

自己紹介するとマチルダは微笑んで、きれいな右手を差し出した。左手は形良く胸元に置かれている。彼女の育ちの良さを伺わせるしぐさだ。

「それは、私をリーダーと認めて、ともにゼテギネア帝国と戦うということだな？」

「ええ。そのとおりです」

グランディーナはわずかに表情を和ませ、マチルダ

の手を握り返した。

「ならば話が早い。私はゼルテナアの里に行つてランスロットに会いたい。案内を頼めるか？」

マチルダは頷き、遠巻きに群衆を振り返った。

「ゼルテナアに行くには船が要りましょう。いまから向かえば今日のうちに入れます。少しお待ちを、グランディーナさま」

「私に敬語は不要だ。私は戦争屋であつて、あなたに敬意を表されるべき人間じゃない」

マチルダは少し驚いたような顔をして、微笑んだ。

彼女が手を挙げると何人かが応じた。ウォーレンが話していたゼノビア王国騎士団の生き残りだろう。

そのうちの二人が港の方に走っていくのを確認してマチルダは再度グランディーナを振り返った。

「私たちも港へ行きましょう。ですがその前に、あなたの傷の手当てをされた方がよくありませんか？」

私はロシュフォル教の司祭です。僭越ながら手当の心得もありますわ」

「もう血は止まっている。気遣いは無用だ」
それでマチルダは黙って先に立った。

人びとの視線のなか、二人はダスカニアの町中を通り過ぎて港に出た。

ダスカニアの町はフェルナミアよりも少し規模が大きかったが、それでも五分とかならぬ距離だ。

港には小さな帆船が待つていた。グランディーナとマチルダが乗り込むと船はすぐに港を離れて、沖に見える島影を目指したのだった。

船には先に二人の男が乗り込んでいて、グランディーナに頭をひとつ下げた。

「彼らはアレックとロギンスです。私同様、ゼノビア王国騎士団縁の者ですわ」

アレックは背の高い方の男でロギンスは肩幅がある方だ。二人とも良い体格をしているが年齢は三〇前後というところだろう。

「良い風が吹いています。ゼルテニアまで一時間もかかりますまい」

アレックがそう言った。きびきびした動きには水夫らしくないところがある。

「あなたの本職は騎士だろう？ 水夫はいちいちかかるとな揃えぬからな」

「そのとおりです、グランディーナ殿。騎士をご存じでしたか？」

そう言いながら、アレックはまたかかたと揃え、自

分の動作に気づいて苦笑した。

「戦場にいれば、騎士にはいやでもお目にかかる縁のない職ではあつてもだ。礼儀正しい騎士ばかりでもなかつたが、他人の礼儀にはうるさかつた。それと彼女にも言ったが、私に『殿』だの『さま』などという敬称や敬語は不要だ」

アレックは神妙な顔つきで頷いた。

そのやりとりを聞いていたロギンスが振り返る。少しがに股で、前屈みになる癖があるようだ。アレックよりもよほど水夫らしい男だ。

「あなたはさしずめ猛獣使いというところか。その手袋には見覚えがある」

ロギンスばかりかアレックやマチルダも、驚いてロギンスの後ろのポケットからはみ出している手袋に視線をやった。

「めざといお人だな。だがこんな手袋など、そう珍しいものじゃないでしょう」

グランディーナは肩をすくめた。

「あなたが求めていたから、推測を言ったまでだ。それに猛獣使いや魔獣使いはあなたのように肩幅のある体格をしている者が多かつた。手袋だけで判断したわけじゃない」

「これはお見せしました。あなたをリーダーにするというウォーレン殿のご意向、いまさらながら指示させていただきますよ」

「わたしもだ」とアレック。

マチルダだけが無言で頷いた。

グランディーナは船縁に座り、ゼルテニアのあると思われる辺りを眺めた。

しかし、ゼテギネア帝国からもしたたかに隠されてきた里は、そこにあるとわかっていても容易に判別できるものではないようだ。

「ゼルテニアの里はあの島の内陸にあります。海からではまだわからないかもしれません」

グランディーナの見ようとしているものに気づいてかマチルダが声をかけた。

「念入りに隠されたものだな」

「ゼノビア王国騎士団の最後の拠点と申し上げても差し支えありませんわ」

グランディーナは近づいてゆく島を眺めた。

彼女らの背後で夕陽が沈んでいき、一時、空が真っ赤に染め上げられる。人の顔さえ赤く見えるなかでも、グランディーナの銅色の髪はなお輝いていた。

辺りがすっかり闇に閉ざされて、月明かりだけが頼

りとなったところ、船は島に着いた。

アレックとロギンスを残して、マチルダを先頭にグランディーナはゼルテニアに向かった。

ゼルテニアの隠れ里は、森と洞窟を巧みに利用したところであった。その入り口には見張りらしい若者が二人立っていたが、グランディーナとマチルダを見て驚きを隠しきれないようだ。

「ランスロットさまにお取り次ぎを。私はマチルダⅡエクスラインです。ウォーレン殿の仰っていた私たちのリーダーをお連れしました」

「どうぞ、お通りを、マチルダ殿。ランスロットさまには知らせに行ってください」

ゼルテニアの里は、人がやつと二人すれ違えるほどの細い通りが幾重にも折れている狭い町だ。隠れ里ともなれば自給自足が原則だろう。

こんな時間の来客も珍しいようで、たちまち通りを塞いでしまい、その間にアレックとロギンスも追いついてきた。

その人混みのなかをかき分けるようにして近づいてくる者があった。

マチルダが軽く会釈をしてグランディーナの後ろに回り込む。

家々から漏れてくる灯りのもと、人びとの視線はグランディーナと近づいてくる男とに集中した。

「あなたがランスロットか？」

彼がすぐそばまで来るのを待って、グランディーナは声をかけた。

「そうだ。君か、ウォーレン殿の言っていた新しい我らのリーダーというのは。誰か灯りを持ってきてくれないか。彼女の顔をよく見たい」

ランスロットは、栗色の髪に青い目をしたハンサムな男性だった。年のころは四〇歳前ぐらい、その表情には隠遁者の風情さえある。アレックよりも騎士らしく、かかとを揃えて、背筋が真っ直ぐだ。

グランディーナの視線に気づいてか、ランスロットは笑みをもらした。

「なるほど、いい目をしている。君とならば、ゼテギネア帝国とも戦っていけそうだ」

その言葉に、彼女も初めて表情を和ませた。

「わたしの剣を君に預ける、帝国を倒すまでともに行くことを誓おう」

「こちらこそ、よろしく頼む」

二人は握手を交わした。ランスロットの手だけが、騎士らしくなく無骨であった。

同時に人びとが歓声をあげた。「ゼノビア王国万歳」やら、気の早い者になると「打倒ゼテギネア帝国」を叫ぶ者までいる始末だ。

ランスロットが人びとを制した。名目はどうであれ、ゼルテニアの実質的な代表と思わせる仕草だ。

「みんな、静かにしてくれ！ 聞いているとおり、わたしは彼女に従ってゼテギネア帝国と戦うつもりだ。ヴォルザーク城のウォーレン殿も合流する。長く、辛い戦いになるだろうが、ともに戦おうという者は五日後に——」

「明日だ！」

グランディーナの言葉は、そこにいた高揚した気持ちの人びとにいきなり冷水を浴びせかけた。

「打倒ゼテギネア帝国」という勇ましい言葉に踊らされたゼルテニアの人たちは、浮かれきった気分から自分の足下を見直す羽目になった。

「私はあなたたちをゼテギネア帝国との戦いに連れていく。命の保障などできない。まして勝利できかねど誰にもわからない。だから、明朝までに用意のきぬ者は来ないがいい。烽火は挙げた。帝国は我々の準備ができるまで待ちはしない。戦いとは人を殺し殺されるものだ。一時の高揚した気分などすぐ冷める。」

あなたたちに人を殺す覚悟はあるのか？ 打倒ゼテギネア帝国を叫ぶことはたやすい。だがあなたたちに自ら武器を取る勇氣はあるのか？」

グランディーナは腰の刀を抜き放ち、頭上に掲げた。昨日と今日と血を吸ってきたその刃は、家々から漏れる灯りに鈍い輝きを見せた。

「異論があれば聞こう。私は飾り立てる言葉に慣れていない。まして、ただ煽るだけの言葉にはな」

「いいや、リーダーは君だ。わたしこそ、差し出がましい真似をしてしまつて悪かつた。君の指示にわたしは従う。だが夜が明けるまでにはまだある。大したもてなしはできないが、わたしのところで休んでいくといい」

「承知した」

「私たちも一緒にお伺いしてよろしいですか？」

「広いところではないが、歓迎するよ。君たちが一緒に戦つてくれるならば心強いね」

刀を鞘に戻したグランディーナは、彼女らに自然に道を開けた人びとを振り返つた。その表情は先ほどの言葉が嘘のように穏やかだ。

「私は脅しは言わない。本当にゼテギネア帝国と戦いたい者だけ来るがいい。明日の朝、ゼルテニアを発

つ。それ以上は待たない」

ランスロットの言つたとおり、彼の家は五人も休めるような広さではなかつた。しかも武器以外にろくな物も置いていない。壁にかかつた麦わら帽子、狭い寝台、わずかな食器と小さな卓は、主の質素な暮らしぶりをしのばせるには十分であつた。

「歓迎したはいいが、もてなしはろくにできそうにないな」

そう言つて彼は苦笑いした。

グランディーナが遅れて入つてきた。

「君たちに振る舞えるのはこれくらいかな」

そう言いながらランスロットが卓に置いたのは大人が一抱えできるほどの瓶かめで、酒精あるといの香りが漂つてきた。

「せつかく来てもらつてもご馳走できるのは林檎酒だけだ。杯も二つしかない。すまないね」

グランディーナが肩をすくめて言つた。

「ここに来たのは王侯貴族のようなもてなしを受けるためじゃない。それと酒は嗜じままない。私は外で休ませてもらう」

「あまり小屋から離れないでくれ。我が家の裏は崖つぶちだ」

「わかった」

グランディーナはすぐに崖を見出した。

振り返るとゼルテナアの里は静かなものだ。

彼女は墨で塗りつぶしたような夜の海を見やった。

ゼテギネア大陸でも東の辺境の島は、帝国の喧噪などまるで感じさせぬ静けさのうちにある。

そこへ足音が近づいてきて、グランディーナは振り返った。

「驚かせたかな。簡単なものだが食事をもらってきた。水もあるから食べるといい」

「あなたは？」

「君たちが来る前に食べた。ゼルテナア的环境は厳しいものだが、貧しいわけではないのでね」

「そうか。ありがとう」

ランスロットが持つてきたのは、黒っぽいパンと干し魚だった。差し出された水筒の水とともに、グランディーナはそれを黙って食べた。そして彼をそう待たせなかった。

「君は軍隊にいたことがあるんだな？ わたしもそうだが、皆、早食いになる」

「そうだ。いつも傭兵部隊にいたが雇い主には不由しなかった。仕事を選ばなければ、だが。ウオーレ

ンに逢ったのは契約が切れた時だ。選択の余地はなかった」

「君はゼテギネア大陸の生まれではないのか？」

「そうじゃない。私は大陸の人間だ。だが、わけあって五年前にゼテギネアを離れた。いろいろなところで雇われて戦って、いつかゼテギネアに帰ることを願っていた。選択の余地がないとはそういうことだ。ゼテギネアにいつ帰ればいいのか、自分では決めあぐねていた。ウオーレンに逢わなければ、まだ帰ってこれられなかっただろう」

「逢う？ わたしの知っている限りでは、ウオーレン殿はヴォルザーク島に來られて以来、島を離れられたことはないはずだ。君はどこでウオーレン殿に逢ったというんだ？」

「ウオーレンにも似たようなことを言われた。私が彼に逢ったのは三ヶ月前のことだが、彼が私に逢ったのは三日、いいや、昨日の話だから四日前だ。だが私は彼に逢い、ゼテギネア帝国と戦うのが私の運命だと告げられた。何を迷うことがある。ゼテギネア帝国を倒すことこそ、私のたつての願いだつたというのに」

「そのために、君はずつと戦場にいたのか？」

「いつもというわけではないが、自由身分であつた

ことはほとんどない。参戦したのはいつも負け戦ばかりだったから、自慢できた話でもないがな」

ランスロットに返されたのは空になった水筒だけだった。

「君とは奇妙なところで気が合うな。わたしも参戦した戦は全て負けてばかりいた」

月明かりがあつてもお互いの顔はほとんどわからぬ闇夜だ。しかしランスロットは、グランディーナからわずかに緊張感がほぐれるのを感じた。

そこに灯りが差し込んで、グランディーナもランスロットもまぶしそうに目を細めた。

「ランスロットさま、お戻りを。ゼルテニアの方々が旅支度をするのにお知恵を拝借したいそうですわ」

二人の反応に気づいてか、マチルダは角灯ちんたんに手をかざしていた。

「残念だな。君とはもつと個人的に話をしたかったが、それどころではなくなつたようだ。皆の反応を考へれば、残念とばかりも言つていられないがね」

「私はここにいます。時間が空いたら、いつでも聞こう。今日でなくても、これから話す機会はいくらでもあるだろう」

ランスロットはその言葉に同意するように手をあげ

てみせた。

彼の代わりに近づいてきたのはマチルダだった。

「グランディーナ、アレックとロギンスは先にダスカニアに帰りましたわ。ゼルテニアの方が明日には発つのですもの、ダスカニアの者ものんびりしているわけにはいきませんものね」

「そこまで考えてはいなかつたな。ダスカニアにはあなたたちのほかに同志がいるのか？」

「ええ、もちろんです。ヴォルザーク島はゼノビア王国の時代からあまり省みられたことのない辺境でして、ゼテギネア帝国になつてからも、それは変わっていません。いまはそのことが幸いして、ゼノビア王国縁の者のかかりの数が、ヴォルザーク島中に潜伏しているのです」

「それでも、かなりの者が残党狩りで討たれたそうだな？」

「そうですね。ウォーレンさまやランスロットさまのようなゼノビア王国に直接縁のある方はほとんどいません。私たちのほとんどが、親兄弟がゼノビア王国に縁があつたという者です。ゼノビア王国のことなど、親から聞いて知つているだけという者も少なくないのですわ」

「そうか」

グランディーナはその眼差しを海へ向けた。

「私はまだここにいる。あなたも休んだ方がいい。明日はヴォルザーク城まで行くつもりだ」

「その前にひとつ伺ってもよろしいでしょうか、グランディーナ」

「私で答えられることならば」

「なにゆえにそのように急がれますか？先ほどのこともそうですが、このゼルテニアからヴォルザーク城まで一日で行くのはかなりの強行軍のはずです。あなたにはそれほど無理ではなくても、皆はすぐにまいつてしましましょう」

グランディーナは振り返り、真っ直ぐにマチルダを見つめた。

彼女が手をあげたのでマチルダが振り返ると、ランロットが立っていた。

「この刀がゼテギネア帝国だ」

マチルダの手にいきなり曲刀が押しつけられたので、彼女はまたグランディーナに向き直った。刀身は細いが意外に重たい物で、その重さを予測していなかった。彼女はわずかによろめいた。

「何人いるのかは知らないが、我々の戦力はこの魚

の骨ぐらいのものだろう。徒手空拳、最初から無謀な戦いであることはあなたにもわかってはいるはずだ。それなのに戦いに行こうと言えば、なぜと訊く。戦いはもう始まっている。戦場で迷えば、自分が死骸になるだけだ。判断の遅れは死につながる」

「それに我々は、いつまでもヴォルザーク島に閉じこめられているわけにはいかないんだ」

ランロットが近づいてきて言い、グランディーナは頷いてみせた。

「さつさとゼテギネア大陸本土に渡らなければ、蜂起しても帝国軍が島を包囲しないとも限らない。港を抑えられてはどうしようもなくなる。そうだろうか？」

「帝国が本気で攻め込めば、この島など簡単につぶされる。我々の望みも潰えるというわけだ」

「私は差し出がましいことを申し上げたのですね。申し訳ありません」

「あなたが謝るようなことじゃない。フェルナミアとダスカニアで帝国兵とことを構えたのは私だ。そのせいで皆を急がせている、あなたたちにはそう責める権利がある」

「いいえ。そんなことは申しませんわ」

マチルダが曲刀を返したので、グランディーナはそ

れを腰から提げ直した。

「あなたが私たちの指導者です。私は私にできることををいたしましょう」

翌日、ゼルテニアの里の通りは、発つ者と見送る者であふれていた。

古くさい鎧を身につけた者もいる。鎧も武器も新品の、傷ひとつないのを身に帯びた者もいる。杖だけ持った者、本を脇に手挟んだ者、そこに集まった人びとの武装はばらばらで、しかもどれも使いこなされてきたとは言い難かった。

だが、ランスロットとマチルダを従えるように降りてきたグランディーナを見守るのは、武装の違いなど関係のない、人びとの熱い眼差しであった。

「全員をダスカニアまで運ぶ船はあるか？」

「ゼルテニアにはない。だが、ダスカニアからアレックとロギンスが仲間と船を連れてきてくれた」

「ならば話は早い。そのまま船でヴォルザーク城へ向かう。異論はないな？」

もはや反対の声はあがらなかつた。

けれど、別れを惜しまぬ者もまたいなかつた。

一度ゼルテニア、ヴォルザーク島を離れば、次に

帰るのは戦が終わる時だろう。それがいつになるのかは誰にもわからないし、それまで互いに無事である保証もない。

去る者と残される者と、話も涙も、いつまでも尽きぬようであつた。

「ランスロット、あなたの身内は？」

「いない。一族はゾングルダークで処刑されたし、妻も病気で亡くなった。わたしは男やもめだ」

「そうか」

「君が気にすることはないさ。わたしのことよりも、彼らを急がせた方がいいんじゃないかな。歩くより速いとは言つても、ヴォルザーク城はそう近いわけではない」

「そのようだな」

グランディーナは船を飛び降りた。

彼女が何も言わなくても、多くの者が時間切れになったことを悟る。彼女の行動はそれほど注目され、目立つてもいた。

皆が船に乗るのを見届けて、グランディーナは最後に乗り込んだ。

「ヴォルザーク城まで行くぞ！」

真つ白な帆が翻つた。

三艘の船はたちまち、島を離れていった。もはや誰も別れの言葉を交わしはしなかった。ただ互いに見えなくなるまで、手を振りあっていた。

「アレック、ロギンス、船を持ってきてくれたこと、礼を言う。あなた方が先にゼルテニアを発つたことはマチルダから聞いた」

二人は顔を見合わせた。応えたのはアレックの方だ。「あなたが明日発つと言われた時、わたしたちはダスカニアの仲間にも準備してもらわなければならぬと思つたのです。ダスカニアに戻つてから皆に事情を説明すると、彼がゼルテニアには船が足りないだろうと言つたので、船でやってくることにしました。礼を言われるなら彼の方がふさわしいでしょう」

アレックが紹介したのは分厚い本を脇に抱えた学士風の若者だった。亜麻色の髪を肩で切りそろえ、少しつり上がった緑色の眼が印象的だ。

「エマーソンⅡヨイスといえます。あなたのことはウォーレンさまから聞きました。それにしても強引な方ですね。もしも僕たちが船を持つてこなかつたら、どうするつもりだったんですか？」

「あなたが機転を働かせてくれたから船は足りたし、

こうしてヴォルザーク城に行くこともできる。もしものことなど考えてもしょうがない。私は戦争屋だ。目に見えるものと結果しか信用しない。あなたがどれだけの知恵者かは知らないが、戦場に出れば私の実力もはつきりするだろう」

「わかりました。残念ながら僕はあなたのダスカニアでの武勇を拝見していません。判断はこれからさせてもらいます」

「ひとまず船のこと、礼を言おう」

「僕は礼を言っていただけけるほどのことはしていませんよ」

船は、ゼルテニアを遠く離れて、ヴォルザーク島を南に見ながら西進していた。

やがて昼にはヴォルザーク城が視界に入るようになり、船はひとつながりになって城の先の半島を迂回して、小さな湾に入った。

ヴォルザーク城のほぼ対岸にフェルナミアの町があるが、実際の街道は湾を迂回している。

一同が船で来ることはすでに知らされていたらしく、ウォーレンを始めとした人びとが、船の接岸地点で待ちかまえていた。

久しぶりの再会を喜ぶ者もいたが、グランディーナ

が真っ先に船を降りたこともあつて、ダスカニアとゼ
ルテニアから来た者たちは、ランスロットを先頭に横
一列に並んで、ヴォルザーク城で待つていた者たちと
向かい合うことになった。

「グランディーナ、見事、仲間を集めてこられたよ
うですね」

「火をつけたのは私だからな」

彼女は真ん中に進み出て一同を見回した。

「ともに交わるがいい。これからは皆が解放軍だ。
知っている者も知らない者も互いによく知り合つてお
け。明日には命を預けることになるかもしれないのだ
からな」

「解放軍と仰られますか？」

ウオーレンばかりでなく、誰もが驚いたような顔だ。
ただランスロットだけが、笑顔でグランディーナを見
ていた。

「そうだ。皆も心しておけ。我々は反乱軍ではない。
反乱軍とはゼテギネア帝国からの呼び方だ。我々がそ
れにへつらう必要がどこにある？ 我々の目的はこの
大陸を帝国の圧制から解放すること、解放軍と名乗る
謂われは十分にあるだろう。自分たちの戦う理由を忘
れるな」

そう言われて、最初に動いたのは、ウオーレンとラ
ンスロットだった。二人は互いに歩み寄り、静かに握
手を交わした。

「四日ぶりですか、ランスロット殿。いいや、これ
からはわたしたちのあいだでそのような他人行儀な呼
び方はやめるといたしましょう。彼女のことをお話し
してから、まだそれしか経っていないのが驚くべきこ
とのような気がします」

「そうでもありません、ウオーレン。わたしたち
にはあの時から二四年という歳月が流れました。熟考
するにも力を蓄えるのにも十分な時間だったのではあ
りませんか。彼女の判断が性急であつたとわたしは思
いません。わたしたちはいまこそゼテギネア帝国と戦
うべきなのです。生き恥をさらし続けた雪辱を晴らす
べき時なのです」

二人を中心に人びとの輪ができた。それはそのまま、
二人がなしてきた影響力の大ききだ。

グランディーナだけが人の輪の外に立っていた。彼
女はゆっくり移動し、人びとから見て、太陽を負うよ
うな位置に立った。

やがて人びとの話し声がやんで、自然とグラン
ディーナに視線が集まっていた。

「聞け！ これより我ら、ヴォルザーク島を離れてゼテギネア大陸本土に上陸する。さしあたっての目標は旧ゼノビア王国の首都ゼノビア、さらに自由商業都市マラノだ。だが帝都ゼテギネアで女帝エンドラ、魔導師ラシュディに勝利するまで、ここヴォルザーク島に帰還することはないと思え。帰りたい者はいま帰るがいい。いないか？」

返事はなかった。代わりに彼女を見つめるのは、痛いばかりの期待の眼差しだ。

「まずはこのままフェルナミア、次いで大陸まで渡るぞ！」

勝ち鬨の声があがった。それに応じて、人びとは次々に声をあげた。

神聖ゼテギネア帝国への最後の戦いは、この日より始まった。

それは星にさえ未来のわからぬ、長く絶望的な道の上であった。